

映画 『白い巨塔』 をめぐって

山本 薩夫 (映画監督)
 所賀 尚雄 (開業医)
 高橋 胤文 (開業医)
 原 八郎 (開業医)
 林 三郎 (東京医大教授)
 岡野 英規 (慶応大学名誉教授)
 岡野 英規 (映画評論家)

可会

昭和41年11月21日 東京原宿・南国酒家

高橋 去年の邦画界で、特に医学界で相当な反響を呼んだ映画『白い巨塔』(大映)について、監督山本薩夫、映画批評家岡野英規両氏を囲み編集委員の方々を中心に座談会を開きました。どうぞよろしくお話しします。

岡野 きょうは山本さんをお連れして進行係のようなことをやってくれというお話でしたが、もうお集りの先生方は、いずれも座談の名手であられるのでご自由にお話したいと思えます。一応ご出席の先生方を紹介し

立派な作品をお作りになり、今回は『白い巨塔』ということになりました。

この映画で、私も興味の深いのは、観客が三十歳年代、四十歳年代の人が押しかけたこと。興行成績も大変よくて大映も記録を作ったほどです。ご承知のように山崎豊子の小説の映画化で医学界の黒い霧といいますが、権威主義といいますが、そういうものを批判しながら政界あるいは、業界、そういうものに通ずる社会風刺が含まれているということ、とくに男性の中年層にアッピールしたと見て差支えないと思えます。きょうはひとつ医学界の方々に直接この映画のご感想を承われば幸いです。また山本監督にはあれを



山本 薩夫氏

ますと、原先生は東京医科大学の薬理学教授を長くされておられ、もう『白い巨塔』に出てくる権威筋のような代表者とも見てもよろしくお話しします(笑)。それから橋八郎というペンネームで探偵小説などをものされておられる大家はそちらの藤森先生でございます。やはり先生も医家芸術の編集委員をされご本業より映画だとか、文学だとかいろいろもの大変ご趣味の広い方だとお聞きしています。それから先程の高橋先生は故小林一三翁に愛さ

お作りになるのに、いろいろの障害があつて大変苦労されたと思いますが、そんな興話などもお聞かせ願いたいと思えます。

変革を示唆

原 僕も見ましたが、実はですね、大ざっぱに医界全体の立場からいうと、医学界が多少被害者のような……(笑)。まあなんにしても、映画そのものについてはよくこういうふうにとれたとびつくりしてはよくこういうか、私も医者一人として、見ようでは露出過度だということもいえると思うんです。映画としては非常に注目すべきものですが、原作の舞台になった大阪の大学の連中などは、監督の気持だとか作者の気持を知らずに映画だけ見るとかなり被害者のようになり、怒ったかどうか知りませんが(笑)。当然だと思えます。その次は手術場面、よくあのようにとれたと感心しました。原作も半分ほど読みましたが記述が実に正確なんです。医学に関するところが、実によく調べてある。映画自体も手術場面など驚くばかりよくやっています。役者と実際の人物が一緒であるはずないんですが、俳優が手術しているようにしか私には見えなかった。それからああいう大手前がで

れ空壕や東宝の保健方面を担当されたことがあり、芸能界の表裏に通じておられるそうでございます。所賀先生はクラブの副委員長で、今度ベトナムの救済医療団の団長としてベトナムへ突進して活躍されジャージャーリズムでもさわがれた様に見る快男子であり、また私共の会員でもあります。それからあとから慶応大学の林先生がおみえになりますが、先生もやはり私どもと一緒に映画会の委員をされておられ、この映画の審査会で大変偉賞をされておられました。さて山本監督は最近のお仕事は『白い巨塔』であります。ご承知のとおり山本監督の作品傾向はずっと社会ダネのもの、つまり社会を背景にした題材が特色となっており、いわば社会派作家ということになっております。しかし長い作品系列をみますと、それがしつめらしいだけの社会劇ということもなく、表現の基本にユーモアを含む喜劇性もあつて、テーマを風刺するという描法が特色のように思われます。「台風騒動記」とか「赤い陣羽織」近くは「にっぽん泥棒物語」など一見喜劇と見える作品も多そうです。現在は独立プロを根拠に信念をもった意欲的な活動をされておられますが、最近では東映、大映などで毎年ベスト・テンに入る

すね、よく出来ているだけに一般の商業映画に使われるということには一つの問題があるように考えます。それと著者が本で書いておられるとおり、あれは決して現実の大学じゃないというのには当然でしょうが、問題の材料、遠慮なくいえば少し悪い点だけ引張り出しているんですが、まあ現実にはそうばかりとはいえないのではないかと。問題が起きてやむを得ないし承知の上でやりになったんですが、観客に対しては相当強い刺激を与えようと思つて、ただ医者はあのおとりとワウのみにされるのははくは困るんですね。芸術としては別の問題ですが、医科大学関係がみんなああだということに対しては私はやはり困るんです。選挙のことなども強烈に表現して、この点も医者の一人、大学教授の一人として多少被害者であるということはどうも否定できないと思つて。この映画は医学関係の人は不快に思ひ、また一般の人は痛快に感じているんじゃないでしょうか。

林 原教授は医学が被害者となつていて考えられていますが、それは原教授その人が面白だからそうお考えになるのであって、現状に通じている私などからみると、なんとその現実、もっともつと悪化していると思ひ



原 八郎氏

ます、これは一大変革を告げないといけません。そのためには一般の方にもこのような映画を機会によく医学界の現状を調べていただくことです。

所賀 今出てきました質問の中の映画の吹き替えなんかのテクニクの問題、それから原作そのものと映画製作のときに指導されたスタッフ、どういふ人達が指導されたんだらう。それから原作者、山崎豊子さんにそういふ資料を提供したのはどういふスタッフだったらう。そういうようなことなどもお聞きしたいことなんです。

楠 その前に山本監督さんの意図、この映画を作った、それが一番肝要だと思っただけです。そういう予備知識を入れてから。

めに坂当りが強いという話を聞きました。撮影の準備の段階に入り、これは大阪の話だから現場の大阪でとったほうが良いと考え、最初は阪大へちょっと見に行つたわけです。ところがちょうど増改築中で裏の空地なんかごちゃごちゃになってほとんど撮影などできない状態でした。で、東京でどっか捜そうということではいろいろ苦心したわけです。

苦労したロケ

岡野 随分方々で撮られたそうですね。あの手術の場面は実際に大映の人が患者になつて……

山本 ええ、そうです。手術というものは



原 三郎氏

山本 この「白い巨塔」というのは、実は私から出した企画ではなかったんです。大体映画の場合に監督がどうしてもこういう企画でやらしてくれと、企画会議、これは社共が決めるわけですが、希望条件を出す場合と、会社のほうできめてこれをお前やれと、いうのと両方あるわけです。「白い巨塔」は実はぼくがやるんじゃなくて、大映にいる専属の方がこれをやりたいということと一年くらい前から話があったんです。それが、この企画はなかなかの大作ですから慎重に検討され一時は中断したんです。ところが以前田宮二郎を主演で大映が映画化した時の京都撮影所のプロデューサーの財前という人が、たまたま山崎さんに田宮のできるものを書いてもらおうと頼みに行つたそうです。それが二年くらい前だそうですが、そのときに山崎さんが自分が今ちょっと書こうと思っている材料があるといわれたそうです。大体これはお医者さんの話だということだったそうです。そのときに山崎さんは主役の名前をつけるのに考えたあげく、その財前というのをとったというのです。そのプロデューサーの名前をね。それから田宮君は本名がなんとか五郎というんです。その五郎をとったわけです。それで田

役者ではああいうふうにはいきませんからなかなかむずかしいわけです。たまたま大映のカメラの助手さんの人ですか。その人が胃潰瘍になりましてね、どうしても手術しなければならんということになり、世田谷の病院ですがそこで切つたんです。それを利用して頂いたわけです。

原 なかなか、うまく撮れていた。
山本 手術室の中は別の手術室を使い、これははじめはちょっと見えていたところは役者を殺かして、ちよつとこみ入ったところは人形なんです。ここでこういう話をすると……
……。(笑い)

岡野 タネ明かしで……。(笑い)。
原 手術の患者が人形なんですか？ それいへば少し動きが悪かった。(笑い)
山本 中に出てくるのは相談したらブタが一番いいだろうということで、ブタの新しいやつをもってきまして。(笑い)そこへ先生方を配置して……
原 そうですか。そのへんがお聞きしたかった。
岡野 そんなところは、映画技術ではABCです(笑い)。

所賀 それから病理解剖の教授がやるとこ

宮二郎を主役に自分の本の中の医者に仕立てたという話をぼくはあとから聞いたんです。そういういきさつがあって、大映としては一年くらいおいてから急にぼくにやれという話になりました。そのときにぼくも原作を読みました。ぼくは医学界や医学についてはあんまり知識がないので、それから認領しました。原作読んで、これは大学の一つの権威主義というふうなものが一つの大きなテーマになるんじゃないかと、それからもう一つは誤診問題がある。これも映画は不十分でしたが、この二つのテーマで行こうと引受けたわけ、製作の意図といえはそういうことになりました。

楠 その二つに興味をもたれたわけですね。
山本 ぼくも驚いたわけですよ。こういう世界があり得るのか、しかし山崎さんにはじめてお会いしていろいろ話をしたところ、いやいや私のものはこんなものはまだまだ浅いですよ、というご意見でした。そのときのいろいろお話しでしたが、大阪の国立大学の国立で阪大以外ないわけですから、当然阪大だということが明らかに、大要そのた

ろはあれば人間の死体でやっただけですか？
山本 いや、あれは人間じゃございませぬ。あれも寝ている格好、最初のところはほんとうの人間で、それからおなかのところからはやっばり人形です。死体解剖するところは今亨させません。

岡野 この種の映画は、そういう部分的な問題ばかりでなく、映画自体を作るということが大変なことなんです。原先生がおっしゃったように、その方面の方連にはまず不愉快なことになりますね。それから映画会社が資本なんかにかからんで、そういうもの作らせない。それで「白い巨塔」の場合は日本であれを作る監督は、この山本さんから内田吐夢さんあたりだろうと見ていたくらいに、また監督も限定されてくるんですよ。大映というのは永田さんという人はもちろん資本関係のこともあるが、根っからの活動屋で仕事のためには名料も捨てるといったような野人的性格がある。よしやつつけろというような気概のある人物です。だからこの企画は永田さん取り上げてくれたと思っただけです。ああいう作品が日本の商業映画としてできたということ自体出色な出来ごとだと思っただけです。永田・山本コンビの産物ですね。他社では出来ま



氏 輝 岡 所 質

ならないし、相当高く取られるわけです。そう思っていたところがそれが駄目だということです。

楠 断られた……。

山本 一切「白い巨塔」に協力しない。してはいけないという命令があったのか知りませんが、ガン研の中一切貸すことはもちろんのこと全部断られましてそれで困ったわけです。

原 病院内は、たしかにどっかの病院、ですね。

山本 表は聖ロカで、それで裏は明大、病院は二カ所使っています。(笑い)

原 きょうはどっかの病院としておくわけですね。

楠 それは快く貸してくれましたか？

山本 ええ、そこは、一カ所は快かったんですが、一カ所は撮影は三日間かかったわけですが、たとえば窓下が出たりしてますね。毎日続けざまにはできません、病院ですから、日曜日とか明いている日をお借りしたんです。そうしたら二回目に行ったら駄目だということになったんです。その院長のところは嚴重な抗議がきたと。

原 よそからきたんですね。

山本 ええ、絶対駄目だということで、困ったんです。そうしたら若いお医者さん達がせっかく今まで協力しているんだから、もうとったことにして、やりましょうというて協力して下さったんです。大変助かりました。

林 それは大変でしたね。若い医局員、若い研究者が心ひそかに協力したでしょう。それが大切なことです。その若い正しい思想をいっかくじかれるのです。それがいつかということをよく見詰めなければなりません。――そのいつかまげてゆく、それまでは学問一点張りの思想だった若い人が、学問を中心とする考え方をすてる時のことです。

楠 教授の回診の場面は……

山本 回診はセットです。

原 セットにしちゃうまい。おっしゃるとおりはくは映画はABC以前なんです、しかし大衆はABC以前ですから。

岡野 原先生、今度はこちらから質問しますが、教授が回診するところ、天皇様のお通りみたいですが、あれ現実ですか……

原 あんな調子です。あのへんは大体あれに近いです。まあ映画だから少し過度だけれども大体あれに近いです。

岡野 医科大学の教授になるということは大変なことですね。

原 原作は原作として監督さんはやっぱり医者を少し飾りつけてやろうとか、そういう意識はあったんですか。

山本 いやそれはほくはむしろ、さつきも思ったんですが、ほんとうはほくはじやなくて山崎さんが来たからよかったと思うんですが、(笑い)ほくは原作の中から、簡ちゅうからは出ておりません。でも映画だから多少それを小説以上に誇張したところがあります。

原 ほくはそう思うんです。きょうはむしろ映画の問題で、大衆というのは映画だけが対象になるんですから、で、大阪の学部長なんかも非常に素晴らしい人にもいるんです。医者の封建的とかなんとか、そういうものを一つのものに集約したと見るべきで、大阪大学をモ



氏 文 風 所 質

デル的に見るのは当然だと思うんですね。その点で大阪大学は非常に迷惑で怒るのも当然だろうと思います。

岡野 この映画は一版大の内幕をえくつたと見るのは狭い見方で、学界、政界、身近な会社の内部と見るべきでしょう。

楠 監督さんね、私一番感心したのはキャストです。ほんとうにじっくり合った役者を使っていますね。あれは監督さんが選ぶんですか？

山本 はあ大体、それで予算の関係もあります。ちかごろ俳優は高いですから、今度は新劇のベテランを使いました。

岡野 新劇のベテランをワキにおいたこと、この映画は成功した。

楠 龍沢修さんの船尾教授なんているのはまったくびつたりですよ、あれはね。

原 教授会の病理の教授。

山本 大河内。

原 テレビなんか見ていると気に入らなかつたけれども映画はよかったです。

山本 加藤嘉です。

所質 私実は昨晚見たんですがね、原 どこでやりましたか？

所質 浅草で、観客は非常に入っておりま

す。やっぱりそれは問題性の捕え方が映画として成功しているからだと思います。原作者がいくらか上手に書いても映画としての捕え方がまずいとなかなか観客動員というのはいまいないで、今までは医者の映画は当らないと聞いておりましたが、今度の場合おそろくそういう意味の新しいテーマを取り扱って成功しておられますね。私も今まで外国の映画などはかなりそれに近い、医学や医者を取り扱った映画で成功例を見ますが、日本では駄作ばかりで、最近では「赤ひげ」以外あんまり成功例を見ませんね。

山本 逆の場合がある。

所質 今回せっかく取り扱われたんですが、今後ともひとつそういう問題を掘り下げることがやっていただきたいというのが医者の立場の願いはあるわけですが、ただやはり役者それから原作者というものが医者でないために、また医者でないために出るよさというものもあるわけですからね。

山本 逆の場合がある。

所質 医者でないためにある悪さというものも出てくると、それはやはり一番問題は素人だからあの映画を見てウノミにするということ、それからもう一つ素人だから誤解す

が出てくるんです、やっぱり田宮のね。

原 ほくは財前はよくやっているとと思う。

所賀 そこを使いこなしたのは監督さんの腕ですからね。それは成功のもとじゃないかな。

原 なんかバアの女の子が来るでしょう。あれテレビのなんかによく出ていた。だれですか？ 魅力ある女性。

山本 ええ、あれは文学座の小川真由美。

原 ほくには魅力あったな。

山本 うまいですよ、なかなか。

どこにもいる登場人物

楠 監督さん、こういう種類のものの一つの原型というものですね。そういうものが、たとえばあれですね、昔の、芸ごとの相模問題などという原型が日本には伝統的にあるんですね。それから殿様の跡目相続、ああいうものは日本人の考えの中にいつでもひそんである一つの原型じゃないでしょうかね。

監督さん、この原作を読むとどこにも、あれはあれに当てはまる、これはこれに当てはまるという人物がちゃんといらっしゃいね、従業員とか看護婦とかが読んで品定めをやっているように。

手書しているんです。それが聞こえるんです。それが二時間で五人、ちよっと驚きましたよ。

所賀 だから私中山さんの風刺がだいぶ入っているなあと、思っています。

山本 いやそれは……。(笑い) どういう形で手書やられるのかなあと、思っています。見学したんです。

原 しかし中山君はさっぱりした人だから怒らないでしょう。

山本 中山さん怒ったそうです。あの原作読んでおれをモデルにしたと、(笑い)

原 なんといっても手書に類のない人だから、ああいう主人公が描かれるとそんな気持ちにもなるんじゃないかな。

山本 知りませんけれどもね。そういうこと聞きましてね。

所賀 原作者はどこから取材したんです。うね、ああいう題材を入れたのはだれか医者仲間がいるはずなんです。

山本 これはいいと思いますけれど、毎日新聞の嘱託医で「サンデー毎日」かなんかの医療相談されている大隈さんとかいう先生あたりだそうなんです。その方にも実はお会いしたんです。実は山崎さんに東京に帰っ

山本 ほくもそれでびっくりしました。

原 あんまり当てはめ過ぎていろいろね。

山本 ちょっと看護婦さんと話すると、これはうちの先生や、インターン、あるいは助手さん、よく似ている人がいますよとずいぶん聞かれました。山崎豊子というのは、普遍的な人物書くのうまいんですよ。

楠 これは夏目漱石の「坊ちゃん」みたいにどこの学校の先生にもみんな当てはまるんだ。そういう普遍性というものが観客を動員する原動力ですね。隆慶保険もちょっと突っいているんですよ。レントゲンなんか。

山本 あれなんかもわかりませんので調べたんですが。

楠 あれなんかいいたところ突っついています。原作にもあります。

原 俳優達の医者ぶりもよくできていた。

山本 いろいろ練習してもらいましたね。ドイツ語しゃべるでしょう。これがいいないわけですよ。田宮君、黒見君、ああいう役の人達はみんな一週間くらいは病院通いして、いろいろな動作の仕方とかそれから患者を診察している先生の姿をじっと見させてもらうとか。

原 四物語はああいういろいろな経過から、截

てお会いしたら、あの材料はほくが全部やっていたんだ。ほくが文章にして渡したんですよ、山崎のやろう失礼だなんて。(笑い)

岡野 「サンデー毎日」に連載しはじめた社会の反響をよんだので編集スタッフが積極的に取材に協力したといわれていますね。

楠 山崎さん自体も非常に足まめに調べる人らしいですね。

岡野 一種の報道文学だから――

原 著者が大阪だからそれで地元大阪の問題を取り上げたんですよが、結局日本の全体に及んでいることだ。

岡野 一つの大学に集約したんです。

原 単純にみると、大阪大学が被害を蒙ったが、大阪大学だけにああいうモデルがあるということじゃないでしょう。

山本 そうじゃないです。

医学界だけの問題でない

岡野 さらに広く考えてこれは医学界だけの問題じゃない。観客だってそういう目で見ていると思うんです。

原 それならいいな。そういう見方ではないと。

楠 だから医学それ自身の一つ手前の問題

判事件もあって、それもどうやら突破し最後結局に結局教授になり、部下を従えてサツウと回診ということになる。われわれから見ると多少文句のいいところだが効果的だな。

楠 裁判はたしか原作では教壇になつてからの問題なんです。

山本 そしてドイツに行くんです。

楠 ドイツに行っている間の問題なんです。ところが監督さんはそれを助教教授の間に取り上げたんです。そうしないとああいう効果的な結末にならないからね。

山本 やっぱドイツまで行くというのは撮影の条件がいろいろあるものだから。

楠 それにああいうもの入れると映画が、だれですよ。

原 で肝心の大阪の大学は被害者だご機嫌はどうですか？

山本 さあ、話がとびますが私がある手術室で中山教授ですか、千葉の、あの手術を私がインターンの見るところから見せていただきましたが驚いたんです。二時間で五人手術しましたね。連続次から次へと、そのときには驚きました。その技術のね。しかもそのときパキスタンかどうかの医者が三、四人見学に来ているんです。それと英語で話しながら

なんでです。

原 大阪大が神経質になる必要はないんだな。

所賀 しかしそういう共通点と、やはり医学じゃないという点はビターとあそこに出ましたよ。その点はたしかにありますよ。だからその点についての問題は一番あとに残っているし、私運もその問題が大事にしたいと思えます。だから診断の問題でも、結局これは財前だろうが役者でなからうが、医者であれば診断のときに自分のわからない部分を検査にまわすとか、わからないところはわからないと思者に率直にいうとか、そういうところを態度でどう示すかということが医者の根本になるわけですね。医者の道。そういう点では拙き方にもう一息工夫されともう少し見た医者達からもっと大きな共感呼ぶんじゃないかなあと思う点多少あります。その拙き方としては、医者じゃない人達にはそういう意味で義憤を覚えさせたり、共感させることで一つの成功じゃないかと、それから最後の船尾教授が欺断を下すあの結論ですね。あの結論は映画でもう少しふんざれておいたら一層よかったと思つた。ふんざれるというところは台詞とか動作とかその中で、対立

先生、こういう作品が医師会というか、お医者さまの先生方には耳の痛い映画には違いないんですが、こういう傾向の映画というものは一応必要じゃないかと私思っているんですが。

原 まあ私は世の中は何かあってもいいと思うんですが、この映画は大学のとくに教授の選考が中心になっているということもついでにわれわれも教授の一人として関心をもつと同時に、やっぱり非常に映画だからどうしても仕方ないんでしようが非常に強く現れ過ぎている。こういうことは私やっぱり大学の一人としてはつきり抗議します。けれどもこういう映画が世の中に普遍的にあることはよいと思う。ここで文句をいうのなら原作者の山崎さんというべきかも知れない。映画にしたのは監督さんですが、ただ観客が非常に多かったということは、やはり社会的関心があったということでもそれも否定できない。また私は最初に申し上げましたとおり、ああい手帳が、こういう営利のものに使われたというところに非常に疑問もつていましたが、あれは演出で行われたということをおききして問題ないと思います。また映画自体、技術的な点でははくは感心しているんです。これもあな

する一つの大きなならんかの具体的方法で示される伏線がもう少しあったほうがよかつたんじゃないかという感じがちよつとしました。

山本 よくわかります。

映画の中では診断問題の断層撮影のことはくわしく、そんなことはいいい切れませんが、原作の中じゃだいたい詳しくやりとりしてありますがね、私たちがみると原作読んで、映画見ても、この助教授が当然自分でやらなきゃならない仕事なんです。あれだけはほかのこといろいろやってるんだから……

所賀 断層やつた上で外科にまわすのが内科として正しい姿ですね。それを追究するよりな姿はあの場面ではないわけですね。

山本 逆に財前に取れとれといっているわけですね。

槽 その前にね、助教授が内科で取つてなきや嘘なんですよ。あれだけいろいろなことやってるんですからね。

山本 それは大きな問題ですね。はじめて聞きました。

槽 それは内科でやる仕事ですから。

林 この映画の訓辞は、どちらともとれる問題をとり扱っているから、スツキリしない

たからいわれたとおりABC以前でしようけれども、しかし私程度の者は多いと思うんです。もう一つ無給医局員の問題なんかは七年の大学を出てあと少なくとも最低四年、六年くらい無給でやっていること、この事実が新聞なんかで書かれてもわからないんですが、私今度のことでよくわかるような気がしますね。くだいようですが表現が強過ぎるよりに思いますけれども、われわれの反省材料には十分なところだと思います。で、私たとえば国立大学でも、あるいは私立大学でも事実大学自体はそんなに変わって

いるものじゃないし、医科大学の封建制というものは非常に論議されているんで、そういうものを、この映画が印象にとらえたということとは私はさしつかえないと思います。これは一種の科学映画であり、社会ドラマ映画ですね。

山本 そうですね。槽 だけれどもね、

解決となり、それが医学界の教いとなったのです。しかしそこで弱くしたので。私は医学の問題をひねくりまわすより医師の道義に触れる問題をつけば、(教授選考で金銭の授受をとり扱っているが、そうでなく患者との問題で)この映画は一層強くなったでしょう。

岡野 最近同じ大映で「赤い天使」という映画作りまして、看護協会から上映禁止の申し入れを受けたが、この映画はね、日本医師会あたりから文句いわれたわけでもないし、本質的に違ふと思えますね。

槽 文句いわないでしょう。むしろ日本医師会は、この中に健康保険のことなども取り上げていることに、むしろ推奨していいくらいだ。大学は研究の場であつて健康保険など考慮しないでいいんじゃないかということを原作者いつているんですが、そうすると財前がそうじゃないんだと、自分達が勉強している連中はその大半は開業医になるんだと、開業医になって出れば健康保険に縛られる、だからその方面のことでも勉強しなきゃいけないんだと里見にいつてますよ。これなんか健康保険に対する痛切な批判だと思いますね。

岡野 制限時間がきましたが、結論的に原

これ見方によると世の中で切迫感を感じて海泣されていく状態というものはやはり一つの進歩だと思ふんです。それはね、広い意味で、どの会社でもあるいは財界でも共通してですね、そうして戦つて登つていくということとは一つの進歩だと思ふんです。だからこういうものがあるって当然いいと思ふんです。それにはいろんなファクターが、金のファクターや技術のファクターや、人間それ自身のファクター、いろいろあるけれども、それを押し除けて登つていくところに淘汰していく世

の中の一つの進歩というものがなきやいかん
と思うんです。これを平々凡々にいったんじ
や意味がないわけです。

原 だからあの映画見て若い女の子達は主
役の田宮にみんなあこがれちゃうんだ。一種
の現代的な行動派といえますか。

楠 たくましい生き方ですね。
高橋 お医者さんと結婚するの増えます
ね。(笑い)

原 しかしあれに直接あこがれるのは困り
ますね。里見とか大河内教授のような者が是
認されながら、あのままではいけないんで、
現代的感覚、現代的力量が必要でしょうが、
この映画は解決しない、それを考えさせると
ころがいいところで、直ちに財前を真似され
ると突に困りますね。勧善懲悪でなく、新し
き現代性を監督さんがもっているところにお
もしろ味があるんだが、すぐ財前に女の子や
若い連中が魅力があるんじゃない。

楠 おしまいのところはちゃんと釘打って
ありますよ。人格を陶冶しなければならぬ
と、監督さんちゃんと釘打ってあるんです
よ。で、原先生は誇張したということいわれ
るけれども、芸術というものは誇張だから、
誇張しなければ芸術にならないんです。だか

ら当然誇張されるべきなんです。されていい
ものができるんですからね。

所賀 この映画は、私はたしかにもう小さ
いことを抜きにして、やはり新しい医者をテ
ーマにした分野を開拓する大きな問題性を提
起した映画だということ、非常に将来の日
本の医学界についても問題性の提起というこ
とで受け取りたいと思うんですよ。ただ私と
しては医家芸術のほうのグループのほうの副
委員長ですから、医家芸術の立場でちょっと
ここでPRしておきたいことは、医師会の芸
術グループに小説のグループがあります。林
先生が音頭取りになって今度文芸部を独立さ
せて北杜夫とか阿部公房とかいう先輩に、私
達も実は小説書いてるわけで、楠先生もそ
うです。医者でこういうことをやっているグ
ループもあるんですが、医者が書いてる小
説というのはどうも医者のこと書いたのはあ
んまりいいのがないんです。むしろ山崎豊子
さんの書いたようなものがないということに
私らはおもしろくないという立場もありま
す。(笑い)是非今後ともひとついいものを
作っていただきたい。

楠 北杜夫の「検家の人々」なんか映画に
なり得ますね。

所賀 そういうテーマを将来映画界の中で
取り上げていただきたいという、これはお願
いです。
高橋 きょうは非常にありがとうございます

〈座談会〉父(鷗外・太太郎・茂吉)を語る

昭和44年3月1日
於・原宿兩國酒家

出席者

森 類

斎藤 茂太

河合 正一

編集委員

原 三郎

司 会

藤田 孝範

原 本日は、お忙しいところ、森類さん、斎藤茂太さん、河合正一さん、お三方においでを願ひまして、まことにありがとうございます。実はわたしは、医家芸術の編集委員として申し上げるんですが、医家芸術では、半ば、特集形式でやっておりまして、年に一度文芸部の特集号をだしますが、ここにおいでで藤田さんにお世話願ひしております。わたしは編集委員の一人として、今回は、明治大正の医人であって、文豪の森鷗外、斎藤茂吉、木下太太郎の三先生についての座談会をいたしたいと思ひまして、三先生の血につながる、一番ちかしい次の時代の方に、おいでを願ひして、こんな幸せなことと思ひております。

まれで、大正十一年(一九二二)に六十一歳でお亡くなりになっておられます。斎藤茂吉先生は、明治十五年(一八八二)のお生まれで、昭和二十八年(一九五三)に七十二歳でお亡くなりであります。木下太太郎(太田正雄)先生は、明治十八年(一八八五)にお生まれで、昭和二十年(一九四五)六十一歳でお亡くなりであります。

で、本日、ただいまおいでくださっておられる森類さんは、明治四十四年一月に、先生のご三男として、先生が五十一歳の時にお生まれであります。これはちょうど『妄想』の完結の前後であります。それから斎藤茂太さんは、大正五年三月、長男としてお生まれで、先生が三十五歳の時であります。これは、わたしどもの短歌の師匠であります前田夕暮が白目社から、『短歌私抄』をお出しになった年にあたります。河合さんは、木下太太郎(太田正雄)先生のご長男で、大正九年十一

月先生三十六歳の年にお生まれです。お名前のはうは、先生のご夫人、すなわちお母さまの河合家を継がれたからと聞いております。ちょうど、木下太郎先生が詩集「食後の歌」を刊行された翌年にあたります。

これだけ申し上げれば私の役目はすむのでありますが、三先生のごことは、随分先生はもちろん、夜吉先生も文豪中の文豪で、木下太郎先生は、若い時に非常に立派な作品を出されていらつしやるんですが、晩年にやはり、大学教授という忙しい、そして太田正雄先生という、皮膚科の大家として、作家活動からはなれた点があったかもしれないが、いずれにしても、三先生が医学者としても第一線のすぐれた方々であります。三先生とも、あるいは専門の医学においてすぐれ、特に森先生のような、官に身をおかれたにもかかわらず、文芸芸術において、ああいうふうにすぐれられておられることを、血につながった方々からお話を願うわけでございますが、むしろ、養育とかなんとかのみに限定せず、お人としての三先生をお憶びくださったら、ということとを、わたし個人は考えていることとあります。

なお、森(類)さんは文芸のはうに親しま

河合 そうです。

藤田 西片町のほう？

河合 そうです。

藤田 あの西片町のおうちには、わたしも一度お伺いしたんですが、木下太郎先生はその頃「微の香りか、編綴か」という西片町の風景をうたった詩を書いておられます。それが非常に西片町のあのへんの古さがにじみでるような、非常にいい歌でした。そうすると、類さんの結婚ということには、お父さまの意思は反映されないような結婚だったんですね。

藤田 ええ、わたくしが十一歳の時に父は亡くなりましたので。結局、木下太郎先生と、うちの父が昔から非常に親しかったので。それで、ほうぼうに書かれておられるのを読みますと、ほんとうのことは、わたくしははつきりわからないんですが、木下太郎先生がたいへんお出来になる方であるにかかわらず、大学の試験なんかには、一課目、遅刻なすったのかなんか、受けられなかったりで試験にパスしなかった。それでうちの父が、それを非常にお気の毒に思っただけで、要するに受けれなかったのであるから、なんとかそこをパスということにならないかという

れ、立派な作品を創られていられるというところをうかがっております。斎藤茂太さんの活躍は、やはりお父さんと同じに、精神科で専門にご活躍されながらも、文芸芸術活動もされていることは、ご紹介するまでもありません。また、河合さんは、横浜国立大学工学部建築デザイン学科のほうで、すぐれたお仕事をなさっていると同っております。

以上記者のためにご紹介申し上げました。文芸に関することは、文芸部のお世話役である藤田さんに司会していただき、お三方は自由、三先生が一番かしこい方として、家庭的、人間としての先生方を憶びながらお話ししていただきたいと思っております。

藤田 よろしくお願ひ申し上げます。早速ですけれど、森(類)さんのご結婚のご縁の人は、木下太郎さんだということ伺ったんですが、そのへんのことから、お話ししていただけないか。

藤田 わたくしどもの結婚に、木下先生が仲人をして下さるようになりましたのは、わたくしの二番目の姉の小堀吾奴が、与謝野寛、晶子両先生が主宰しておられた雑誌の「冬抽」に「父の事」と題する文章を連載していたことがありまして、それが木下先生のお目

ことで、大学の、もちろん帝大だと思っておりますが、偉い先生のところを訪問して、非常に優秀な青年であるということ話を努力をしたけれども、ついにだめだった。それでその時の思い出を木下先生が語られているのによると、軍服の父が大学から出てきて、「だめだった」といって、うなづかれたというふうで、どこかで聞いたか読んだかしたように思います。その点はどなたかに話していただきますと……。

藤田 偶然ですが、きのうも日本歴史学会にいて、わたしが日本薬理学の誕生について講演したんです。薬理学の日本の創始者に高橋順太郎先生という方がおられますが、その時における学生が、最後の薬理学の試験の日を忘れて、一日延びてしまった。それでその学生が平野万里さんとかを通じて藤田先生にたのみ藤田先生が、高橋先生と親しんでお頼みしたけれども、やはりだめだったのです。しかし、そういう学生があったけど、とにかく立派な人で、とにかく東大の教授になった人だと書いてあったんですが、わたし伝説かと思っただけで、ほんとの話で、その学生が木下先生であったのでした。東大で太田先生のあと継がれた北村包彦さんが、ちゃんとそれを

にとまっつて、朝日新聞に批評がのりました。後に「晩年の父」と改題されて書物になったのがご縁で、ずつと親しくしていただいております。昭和九年頃のはなしです。そういうことが一つと、それから、わたくしの家内

の母が、自分では書きませんけれども、「青箱」にいた尾竹一枝の妹で、文学の好きな人でしたから、自分の娘の結婚は、ぜひ木下太郎先生のお世話になりたいという希望がありまして、その希望を踏がいで、先生にお願ひしたようなわけです。

藤田 それ、いつでございませうか。

藤田 ええと……昭和六十年だったと思っておりますが……。

藤田 もう戦争の始まったころですね。

藤田 ええ。

藤田 河合さん、そのころは……？
河合 わたしは多分、高等学校だったと思っております。で、お話は多少何っちはおりましたけれども、まだ学生でございませうから、あまり詳しくは存じませぬ。ただ、そのお話が進行しているということは、かすかに知っております。

藤田 もちろん、木下太郎先生が東大にいられてからですね。

藤田 書いておられます。森先生が口をきかれたけれども、高橋さん承知しなかった。それが非常に文学的に情熱をもった時代で、かえって木下先生の、本を読む機会になったというようにございました。……伝説かと思っただけで、ところが、このころでは、あちこちで書いておられますね。

藤田 なにかに書いておられるんだと思っておりますけれども、ただわたくしもこの中で一番苦難で、直接そういう事項を聞くような機会、とうとうなかったんでございますが、間接的にいろいろもってます知識では、やはりあの時代が大学生でございませうから、やはり文芸のことやっていたにしても、それから一面非常にそっかしいところがあるんですよ。それで、忘れちゃったんじゃないか。で、それ一つで、一年延びることになりますんで、本人もあわてたんじゃないかと思っております。それで藤田先生にお願ひして、普通だと、そんなことやっただけでさらないくらいな森先生が、わざわざ書いてくださった。しかしだめだったということ、はつきりしまして、結局一年、ほかのものは全部すんでたものですか、フランス語かなにかやることにして……。

藤田 その間、木下先生は非常にフランス語

とか文学に打ち込んだ時でしたね。その記録もあつちこつちにあります。

藤田 そもそも、森鷗外先生と木下幸太郎先生がお親しくなったのはどういうことからですか。

河合 そこらへんも、むしろごなたが研究なすっている方のほうではつきりするんじゃないかと思うんですが、そういう関係から申しますと、やっぱり大学の時は直接の先生ですし、初めての接触か、あるいはその前に、一、二はなにか接触する機会があったんじゃないか。わたくしもはつきりしておりません。ただ、いまのお話は学生でございますから、なんといつても。

藤田 学生時代からさかんに詩を発表なさっていたでしょう。

原 そうです。

河合 想像しますと、本式のお目にかかったりする機会はその後じゃなかったらうかと思われませんか、あるいはそれがきっかけになつていかもしれません。

藤田 はくは大学生時代の河台正一さんをよく知っているんですが、その時にもいよいよお父さまの話なされるんです。それがいまでも憶えています。なんでも家庭内でございませぬから、それほど成人してからの会話をかかず機会というのがない間にわたしの場合は亡くなりまして、なんと申しますか、こつちも悪いんだと思えますけれども、わたしが父と直接接触する機会をもつたのは、十くらいからこちらにかりまして、初めの一年間、一人で生活していったんです。わたしはその時に仙台だったもので、二高の試験を受けて落ちこみましたもので、予備校を、東京へきてつづいていまして。そうしますと、おやじと二人で飯を食うんですけど、いまの言葉でいえば、まるで權威の象徴(笑)のどまん中に坐っているような、こつちも落ちこちて、浪人で、たいへん肩身のせまい時代で飯食つてゐるわけです。向うもしゃべること下手だといえ、これは森先生とはずいぶん違いますが、モソモソモソ飯食つて、こちらも何いっていいかわからないようなところから始まって、結局、おこうこを噛む音も気になって、よく飯が食えないというふうなそういう時期がありました。

斎藤 内面が悪いということ、それから權威の象徴というお話ができましたが、実にそつくりですね。(笑)いまのお話全く共鳴するんですが、そういう意味で共通点があつ

ほとんどお父さまと話をされないと、食事をついしょになさる時に、なんか音をたてるのも非常に気づまりだったというような話を伺ったんですが、ですからどうですか、非常に立派という中に……。



森 藤 氏

立派であつて、非常にやさしい方で。ほくのことですから、ふだんあまり伺わないで、正月なんかは何ったんですが、「ほくちようど臉を描いているとこだよ」とおっしゃったことがある。「正月だから、人がくるとそれを持って奥へ逃げるんだ」と。なんか逃げる部屋がおりになるようなこととてらしたです。描いているところへ人がくると困るから。「こんなもの描いているんだよ」といって見せてくださった。「ほくは三宅克己(と)おっしゃったと思うんですが、三宅さんという有名な水彩画家がおられまし

たんでしょかね。鷗外先生はどうでした？

河合 鷗外先生は別なんじゃないんですか。

藤田 奥さまに対するお手紙なんかですと、ニューモアがあるし……。

斎藤 わたくしなんか、おやじの前に出ただけで初めから涙ぐんでいるわけですね。最初から泣いてしまふんです。先手を打つて体はブルブル震えますし……。

河合 ですから、お客さんが介在したりすると、もう少しチャンスがでてくるんです。

原 斎藤先生は外面はよかったですよ。

(笑) 藤田 皆さん、そうおっしゃいますが、

藤田 ほくはそうまともに受けとれないですね。というのは、文字なんかやっていると、非常にデリケートでしょう。そして自分の子供というのは、何よりも真剣に考へておつたんじゃないですか。なんというか、向うのほうも、非常に子供に対してめつたなこいえないし、ものすごく愛情はありながらも、ものもいえないって……ある意味じゃ一番敬敬のひとりなんですね。

河合 ですから、すくんじやって、笑顔は

で、この方はもちろん、明治・大正・昭和にかけての水彩画では第一人者のような方なんですが、その方の指導を受けたんだが、三宅さんの影響を受けているようなところがほくの臉にあるかねえ、どう思う？」ついでいながら見せてくださった。そして、支那へご旅行の時の顔だと思つたんですが、そういうようなものもあつたし、身辺にある果物の静物、風景もあつたように思います。なにかいろいろ見せていただいたそのとき、「一つ娘たちを紹介しよう」とおっしゃって、四人……お三人だったかな、中学三年生くらいの方を先頭に小さなお嬢さん方が出ていらして、並ばれました。「みな大きくなって、ひさ小僧がでて困るよ」とおっしゃって、お嬢さん方をふり返つて、ニコニコ笑われて、非常にやさしいお父さまだなあと思つた。目のくりくりした可愛らしいお嬢さん方がスカートをちよつと指でつまんでかくしながら笑われたのが記憶にあります。

藤田 河台さん、そのへんどうですか。

河合 そこらへんはこつちはまるで逆でございます。(笑)要するに内面が悪いわけです。わたくしが、一つは、皆さんそうでございますが、かなり年とつた時の子供でこ

何も進行していないという、へんな状況があるわけですね。まあ、あとになって、わたくしも考へてみますと、たとえば子供の時に、耳の中におできができて、手術してくれたことがあるんです。仙台にいた時に、あとでわたしに、やっぱり自分の子供は切るので大変だということを感じたことがあるんです。ですから、事実上はそういうことがあつても、ただ前でもソソ飯食つてゐる時に、両方ともどういふきつかけつづいていいのかわからずにつづちまう。そういうことなんじゃないかと思ふです。

藤田 茂太先生も初めから涙ぐむというのは、一方茂吉先生の例にもなにかあるような気がしますが……。

斎藤 それはあるでしょうね。心理学的にいえば先手打つたのかしれませんけど、むかし、おやじが診てた女の患者さん、もちろん、今日相当のお年寄りであらうし、引きつづいて私が診ている方があるんです。その方が父のことを「あんなやさしい方はありませんでした」とおっしゃいます。たとえば寒い日に、「まあまあこんな寒い日に、よくおいでになりましたね」とおやじが申したというんです。外業診療で。わたしは

あつてに与えられてね。どうも想像もつかないような発言でございすからね。外面が、特に相手が悪者さんですから、そういうふうによいでしょうけど。

藤田 それは真腹で、それだけ人間対人間に對する考え方が非常に真剣であり、デリケートであり、厳肅であつたと思うんですね。

斎藤 やはり年をとるにしたがつて、少しずつ柔らかなり、好々爺になつておりますので、一番つきあひの長かつた長男が最も被害甚大、弟から妹、だんだんと、いいおやじだといふふうなことをいいますね。一番末の妹なんかよかつたといひますからね。しかし、長男の私にはただこわいだけですな、父の印象というのは。

河合 わたしの場合、それだけの条件もあつたわけですよ。といいますのは、私は母の実家を継ぎましたので、休みのたびにじいさんばあさんのほうに顔見せに行つたわけですよ、それから生まれた時にはおやじは洋行してていなかつたのです。おふくろははいましたけれども、あとで聞きますと、帰つてきた時に、顔みて泣いたという話をおふくろがしてゐるわけです。いない人が急に出てきたという感じが、小さい時からあつて、しかも日常

父自体にはぜんぜん権威がないみたいな感じ、頭から親しみそのもので、親しんで、何をいつてもよろしい人物だつたわけですよ。それで子供が何か質問したり、あるいはつづらんどでも、何か言ひに自分の部屋にきた時には、どんなに仕事をしている時にも、ふり返つてその話を聞いてやるということが、子供が思春期に進した場合に特にいいことなんです、つまり友達のようにして何でも言ひやすくしておくのがいいんだといひていたんですよ。そのためだろうと思ひますが、いつ、ガツツと聞けてみても、そこに坐つてゐる父といふものは、必ずふり返ると同時に微笑する。それで、子供たちは、何でもいいことといひてしゃべるといふような印象が残つてゐます。そのためかどうか知りませんが、私も、うちほどちらかさといふと、少し、子供たちが父親崇拜が度を越してゐるところがありまして、なんていうか、姉たちなんか、とにかくすばらしいの一点張り、軍服がよく似合うの、すごい美男子であるの、葉巻の匂いが漂つていて気持ちがいい。抱きあげてひざを揺すつてくれて愉快だ。どこからどこまで、手放してノロけてゐるようになつたところで、書いてゐるもの読んでも、他人が読ん

的な接触がなくて、結局、小学生の時にはこちらに先に飯食つて出ちゃう。おやじのほうで捕つてきた時は、こつちは飯すんでゐるわけ、食事もちよつとすれ違ふくらいで、あとは書斎に入つて本読んでゐるだけですからね。時たま遊ぶ時があつても、それは思ひつきみたいなもので、必ずしも普通の家庭とは違ふんじゃないかといふ条件があつたわけですよ。



斎藤 深 太 氏

藤田 あなたは先生が満州からお帰りになつてお宅でお生まれになつたんですか。

河合 そうです。ですからその時からおやじは洋行して三年間いなかつたわけですよ。ですから結局、愛情の表現といふのをどうやうか、わかんないこと、むしろ権威のほうは先に中へ入つてきちゃつた。ですから当時、女の子のほう、妹のほう

だ場合こんな理想の父といふのは存在するのかなつて、ふしぎに思うくらいですよ。それがまた事実なんです。

藤田 男の子と女の子のどちらを可愛いがられましたか。平等ですか。

森 その点は平等だつたと思ひますけれども、やはり女の子のほうに無意識にやさしくするといふようなところがあつたかもしれせん。

藤田 多くの友人に、女の子を非常に可愛いがする。しかもよく体にさわるといふんですね。父親が、男の子には全然さわらない。娘は、かたときもそばに置いて、なんかの拍子に肩を抱いたり、ひざを叩いたり、異常な可愛いがり方をするといふようなのがあつたんですが、嶋外先生、そつだといふんじゃないですか。

森 女の子だから、特にさわつて可愛がるといふことはなかつたんですけど、わたくしもよく抱かれたりなんかしたんですが、明治の人間であり、しかも軍人であるにしては、非常に日常生活がハイカラだつたのです。これは父がドイツへ行つて、向うの軍人はうちへ帰つても、軍服でゐるのを見て氣に入つてドイツ流になつたようです。とにかくドイツ

自然と接触ができたような感じがあります。それからあとには高等学校へ入りまして、私もうちにはおりませんし、父も東大にきてガタガタしておる時代でございまして、そして最後もわたくし、兵隊に出ちやつて、そのまま別れたようなところになつてしまいましたから、父と子としてそこらへんから先の話をする機会がなくなつたわけですよ。結局終戦の年に父は亡くなりまして、あと父の企業を継承するようなことで、私もはじめて実質的な接触が、間接的にできたといふようなこととでございまして。

藤田 そういふ父と子の関係が、大なり小なり、明治時代の父と子の間にあるといふんですが、それはどうでしょうか。つまり父親がまだ権威をもつた時代でしたからね。

森 それは大いにあると思ひますね。けれども、父の場合が初めから頑ぐむの反対で、笑いぐんじやうぐらいで、父を見るときは、父も笑つてゐるといふことで、残つてゐる写真なんかみますと、要するに父が中心に写つていて、床の間の前に坐つてゐるんですけれども、それはそういうことだけであつて、

が非常に好きだつた。これは死ぬまで変わらなかつた。いまはどこでもクリスマスをするんですが、そのころ家庭でクリスマスをする人は少なかつたんです。ドイツではクリスマスといふものをやるというわけ。わたくしのところは非常にふだんは質素でして、父が博物館や図書館の掃りに、銀座へまわつて木村屋からジャムパンやクリームパンを買つてきたり、いまでもジャムパンやクリームパンは、あまり高級なものになつていませんが、そのころだつて同じことでした。

藤田 ジャムパンといふた(笑)……。森 そうそう、そのジャムパン程度でした。そのかわりクリスマスだけは一年一度だから、父としてはずいぶん奮発して、上等なものを買つてくれたりして、子供たちを集めて楽しんでおられます。それが、ドイツではこうやるんだといふので、うちで真似したんです、クリスマスとは関係ないのです。

藤田 茂太先生はお父さんにだつたことされたといふような経験は、あるいは手を握つたといふようなこともございせんですか。斎藤 どうもそういう記憶はないようでございます。父の親友に日本画家の平福百穂といふ先生がいらつしやいましたが、やは

り歌読みでもいらっしやいましたが。その百
穂先生に出した手紙に、「お陰様で茂太は元
気で育っておりますけれども、甘やかされて
いるのでだめです」という手紙があるのです。
なんか甘やかされるからだめだというのは、
ひとの子供みたくない方なんです。それが、
当時のうちの家庭事情が判りになると思
います。父はご承知のように養子で、おふ
くろのはうがどうも元気がよすぎて……。

藤田 よく存じております。(笑)

斎藤 しかも祖父がこれまた元気な方でござ
いましてね。ですからなんか子供の教育方
針とか、そういったものも、どうもおやじの
手の届かないようなところにいたのではない
かと思うんです。そういうことで、どうも身
近かにおりませんでしたね。父が、身近かに
いないという意味は、私の幼小時代、父は精
神科の果嶋病院、いまの都立松沢病院の前身
に勤めておりました。かなり当直も多かった
と思いますし、果嶋からすぐ長崎の精神科の
ほうへ赴任いたしました。いなくなっちゃっ
て、わたしも長崎へ住んだことがありますが、
それはわずか一年くらい。おやじの長崎
生活は、どのくらいでしょうか。数年でござ
いまいしうかね。ですからいぶん離れてい



河合正一氏

はめったにありませんでした。父はパパとい
わせたかったのだらうと思いますが、パパッ
って何かって、誰か聞いたら、女中が、パパ
ッとタバコを吸うからパパだっというのを
真に受けて、そうなったんだとか聞きました。
あまりたしかじゃありませんけれども。
それから父が非常にやさしかったというの
は、わたしも母が、表面やさしさを見せな
い人だったものから、父がなにか非常に
子供たちを気の毒に思っ、二人分よけい
やさしくしてやらなくちゃならないと思っ
たんだらうと、いまになると思うんです。

河合 ですけどご長男の場合はちよつと違
うんじやありませんか。むしろわれわれはそ
ちのほうのジャンルに入るんじやないかと
思うんです。

藤田 お二方はご長男ですね。

原 ……斎藤先生は、ある意味で非常に自
然に……まあ、そうでない場合は(作歌につ
いて)努力に努力を重ねてきた。木下先生
も、東北大教授から東大にこられるあの前後
は、やはり固まった文句い人がおったん
です。そういう意味では晩年に作品が少な
かったことをそういうふうに解釈すむとある

りますね。
河合 ですから非常に父は定年を待って
た。あれが終わったら、もう一度文芸の仕事始
めるんだといつておったんです。

原 スタートでは本太郎先生はなやかでし
たよ。そして非常にいい詩ですからね。ほく
は大正十年から十三年まで外国にいました
が、太田先生が非常にフランス語が堪能であ
ったことをバリの大学の教授から聞いたこと
があります。私はその点いつもある教授に皮
肉られるんですがね。そのころ太田先生に
は、ちよつとお見かけした程度ですけど、
非常にフランスが好きだったですね。ウィー
ンでは斎藤先生と一緒に歩きました。

河合 わたしも、戦後、ドイツに留学した
んですが、最初降りたのはパリでして、おや
じの日記の中に安下宿へ泊っていたというこ
とと、そのころのことが詩の中にも書いてあ
るんです。その下宿がいまも残っているんで
すが、それがマンションになってまして、と
ころがわれわれじやとても泊れないくらい
の値段になっているわけです。昔は安く泊っ
ていたわけです。

原 ほくはカルチニエタンのホテル・ラタ
ンに九カ月はどいましたが、三十一年ぶりに

河合 何ってますと、どうも藤外先生は、
外国にいちゃ、なにか家庭のやり方を、あ
の時代としか、日本的でない方法を実施さ
れたんじやないかと思ひますね。

藤田 わたくしもそう思ひます。

河合 ところがわれわれのほうは、頭では
わかっていても、行動できなかったんじやな
いかと思うんです。そこにいろいろ矛盾を
感ずるわけです。つまり頭ではきわめて西歐
的な方法でやろうとしていながら、本人自身
が、いろいろかつての家族形態でいろんな制
約を受けて、苦勞していながら、自分の段階に
なるとうちやたらできるか。やりたくても
できないようなところで立ち止まったんじや
ないかというように、あとになってわたくし
思ひます。

斎藤 藤外先生をパパというのはどなた
が……。

藤 あれはわたくしの上の姉、茉莉がい
出したのでしよう。だんだん伝染して親戚中
にひろがりました。父の弟や母の兄までがパ
パ、パパっていったわけ。いま思う
と少し滑稽な感じがします。明治・大正時代に
家庭で父のことをパパと呼ぶ家は非常に
少なく、わたくしの家以外で耳にしたこと

いったら、その部屋あけてくれたんですがね。

斎藤 うちのおやじは、外国の風習は頭の中だけで、実際には実行できなかったことが多かったようですけれど。うちのおやじの行ったところは、第一次大戦後の超インフンの混乱期でありましてね。三度の食事を二度にへらしても本を買い込んだらしいですが、日記に、数カ月ぶりで風呂に入るといふ記事がありましてね、お風呂に入るなんていうのはずいぶんぜいたくで水で朝晩体をきれいに拭くというところは毎日やっていたらしいんですが、帰国して実行していたのはその位のもんです。真冬でも水で身体を拭いておりましたが、これはミネンやウィーンの下宿時代の名残りじゃなかったかと思うんです。

河合 話をもとに戻すようですが、わたしは一度父に反逆したことがあるんです。ある新聞の連載小説に、やはりおやじむすこの関係がうまくいかないようなことが書かれていて、それを読んで、わたし、高等学校時代ですが、どうもうちの家はおかしいじゃないかということをおやじに手紙で書いたことがあるんです。相当長い。しかもそれは祖父が神戸におりましたから、そっちから出し

て、たまたまそのころは、わたしは海軍の短期現役の技術士官でしたが、一度うちへ帰った。その時に理研あたりに爆弾が落ちたことがあるんですが、おやじは西片町から疎開しなかつたんです。初めていっしょに、小さな防空壕に入って、ジャンジャン爆弾落ちて、こっちはうらやまがこわいくらいだったんですが、その時二人で、じつとその中に入っていました。何も言わなかったですが。その後ガンになりました。死にめに会えるということで帰ってきたんだと思いますが、その時、こっちは軍人でありましたし、病室でスパスパタバコ吸ったら、とたんにおこられちゃったんです。考えてみれば当り前のことなんです。が、「やめろ」というわけです。こっちは、戦場じゃございませぬが、相当荒っぽい。そういうエチケットみたいなものをいささか忘れていたような情勢でして、社会と家庭の権威のズレが、タバコをきっかけにして、「やめろ」といわれて、そういうことで、非常に堅いほうの接触だけがあるんです。逆のほうは、直接表現としてはないです。

斎藤 お二人の先生のことお聞きしたいんですが、文士に徹夜というものはつきもので

た憶えがあるんです。どうも家庭内の愛情がないということをもっと書いてつきつたわけですが。ところがそれは旅行先から書いたんですが、帰ってきて何にも返さない。最後まで何も返さない。ただ亡くなったあとで、いろいろ整理してしましたら、その手紙がちゃんと手箱の中に入っていたんです。というところは、やはりそうやってまともにつきつければ、子供で、まだ高等学校の学生あたりか



原 三 郎 氏

らきた時に、おやじのほうでは、返答に困ってどうしていいかわからないで、ほうっておいたということであると思うんですが、間接的な愛情は、あとで感ずることはできませんでした。直接的表現には決して出てこなかった。迷いといえば、わたしの直接経験としては、もつとこわい印象ばかりあって、ある意

すけど、先生がたはどうぞいましてしような。仕事を夜なさらしたら、昼間は寝ているというようなご生活もおありになったことはあつたんでございませうか。

藤 わたくしは父が昼間寝たのは一度も見ることがありません。夜、フツと目が覚めると、父がふとんを、子供が寝相がわるいものですから、直してくれる姿がポウーッと浮かんだのを憶えております。

それからいつも夜中に目が覚めてみると、冬なぞ火鉢の上にごこんで、一生懸命、弱くなった火種を吹いている父が浮んでくるんです。だから夜中はずいぶん起きてたということがわかるんです。かといって、昼間は寝ていたかというところ、ぜんぜん寝ていない。これはほとんど役所へ行って、帰ってきたらお客さんが待っていて寝ているヒマはない。これは前年の、別荘にいった時に、眠らないけれど、横になっていたのを見て、珍らしく思いました。いままうと、だいたい弱ったんだと思うんですが、それ以外は活躍していたようなんです。しかし人間が眠らずに活躍できる者がないので、要するに短く深く眠るコツを心得ていたのだと思います。

斎藤 専門の文士なんかですと、たいが

味じゃ、そういう表現はぶきぶきな人間じゃないかと思うんですが、小学生の時の非常に大きなショックは、おやじと遊んだことがあるんです。抱かれたとかかわりませんけれども、藤椅子があつたんですが、わざわざ足の一本を廊下からはずして、「お前、ここに坐れるか」というんです。乗ったら引っくり返るのはわかっている。ほくほくいぶん考えたんですが、そういわれて、乗らんわけにはいかなくなって、乗っちゃって庭に落ちこちて石かなんかに頭ぶつけて、おやじがあらわして止めたことがあるんです。そういうような問題ですね。それから小学生で、臨海学校にいってると、たまたままきてくれるんです。うちで会うのと違う感じがあるんですが、それ以上発狂しないわけなんです。うちから帰ってくると、また元へ戻っちゃう。それから高等学校の時に、北海道を友達と遊んで歩いたことがあるんです。帰ってきておこられちゃったんです。自分も学生時代は相当遊んだけれども、いまそれだけの時間があつたら一週間くらいいいんですけど、なんか目的をもって時間を使わんといかん、なんていわれちゃって、まるぶ遊ぶゆとりがないみたいな。それからあとには戦争に入っちゃいまし

い、夜お書きになる方多いですが、それは皆さんお医者さんだったからでしょうが、うちのおやじもそうです。わたくしのみる限り、徹夜して仕事したということはなかったと思います。ですから、一体、いつ、あれだけの仕事をしただと皆さんおっしゃるんです。それは書斎に、家族と離れて、ほんとに孤立して生活しておりましたけれど、必ずほうちの女房とか、お手伝いさんとか、晩年寝る前に下剤をもらって飲んですね。それで「おい、おい」って、声がかかります。酒利塩です。酒利塩をきまりきった方式で、飲みます。ずつと慢性の便秘で。そうするとわかるんです。ははア、これで寝るんだナ。もう、それは十二時過ぎたことございませぬです。ですから非常に体を大事にしていたと思うんです。したがって、時間当りの仕事量というのはいぶん多かったと思います。書くのでもなんでも非常に早うございまして、それからわたくしが現実を目でみたのは、朝ご飯の時に、食事が終わりました、お茶を飲みながら、そこでザッと、十通くらいの手紙の返事を書いてしまふ。つまり食卓の横に砚と墨と筆がありまして、お茶飲む間に、

ほとんど著書ですけど、サツサツサツと、大きな字で、せいぜい三行か四行ですんじやうんです。非常にスピーディーな生活していたと思います。

河合 その点、斎藤先生の場合はビジネスが、院長さんとしてのビジネスが、かなり量として入ってるんじゃないか。

斎藤 あまり熱心な院長ではございませんでしたよ。(笑)。

河合 そういう意味で、わたしの父の場合ビジネスにはずさんなんですけど、ただ仕事の研究内容とか、原稿の執筆などは、まるで汽車の時間割みたいにチョクチョコク進行している態勢であった。わたくし、子供のつき合いだっただけですから、ほんとうに朝まで徹夜したかどうか知りませんけれども、そういう機会もあったと思うんです。朝寝坊であったことは事実です。ですから可能な限りは、時間は、夜中使ったんじゃないだろうか。知っておきますことは、病院から帰ってまいりますのが七時くらいなんです。それからビールくらい飲むんですけど、あまり強いほうじゃございませんから、それからひと眠り、必ずしていたわけです。三十分から一時間くらい。それで、なにか時間の使い分けがその後

あるらしいです。医者の関係と文芸の関係。それはなにか手まめにやっていたような感じがいたします。

もう一つはお客さんなんですけど、うちの中で非常に大きな声が響いてくるようなのはおもしろいお客さん。それはお医者さんのつき合いじゃないわけです。これは仙台なんかの時期のほうが、むしろそういう時間があったんですが、われわれ子供で憶えているの



斎藤孝氏

は、河野身一さんが、こられたら帰られるのが夜中の三時くらいになるわけです。おふくろがプーピーこぼしているのをこっかが聞いている。その時は長くなっちゃう。そういうことは、よく憶えております。

原 太田先生はああいいう芸術家だったんですけども、学問にかけても非常にきびしい科

学者でしたね。それであなた、科学やっておられますがどういふふうにお考えですか。科学と文学をはっきり区別してたんですか。

河合 わりやりに自分で時間設定して、これはこっちだとやらなければさげなかつたんじゃないですか。晩年になると、それが機械的に整理できるようになって、仙台時代は時たま、延びちゃったら延ばしちゃうというようなことだったんじゃないかと思えます。最後は、わたしが大学生になりました時は、ほんとの意味でプロフェッサーでして、医局の人が、プロフェッサーがあまり朝早く出てくるのは困るといふくらい早くいっちゃったです。

原 それがおたくしどもが多少知るの、仙台あたりから非常にきびしい皮膚科の科学者でしたね。それが定年なんかを持つ心理があったんでしょねえ。

河合 それともう一つは、倫理感を生来篤かったわけです。ただ自分は、若い時は相当ハメはずしたこともやって、やはり方法的にそれ、やめたということがあったんじゃないでしょうか。まア、性格もそれに結びついて……。

原 それが海外先生あたりがああいいう重職

におかれて、やはり一種の政治ですね。そういう点で、大学教授であるより、芸術行動があの時分、大変なことだったでしょうが、まだやりよかつたんじゃないですかね。

河合 ただ、自編自譯のコンプレックスがあるわけです。それはこっちは感じちゃうような気がしたです。

藤田 海外先生もそうですし、木下幸太郎先生もそうですけど、ともに全く無駄のない文章を書いておられますね。そういう点は共通してるとんじやないですか。学校の講義でも幸太郎先生の一言一句、全然無駄がなかつたそうですね。

河合 ところが聞いているほうは、よくしゃべることがわからないという状態が多くて、肝心のところは早口にいっちゃやうな……。(笑)

斎藤 文学といっても、俳句もあれば短歌もありますし、小説もありますけど、人間の性格、大きく分けますと、社交的か、あるいは逆の非社交的に分けられますが、お二方の先生の場合いかがでしょう。

河合 ですから、内面でもみえますと、家庭内じゃ、おふくろにあまり親切にしたりうなことも見えなわけですし、これはどう

にもならんと思っておりますと、間接的に、つまり逆の意味では、むしろ類さんなんかは、われわれ子供に対する愛情が、卒直に別の方であるために出せたようなケースじゃないかと、わたくし、ひそかに考えているんです。それから先ほど申しましたように、お客さんが介在しますと、もうちよつと、雰囲気違つたような表現がところどころ出てくるんです。ところがあとでいろいろ聞いてみますと、芸術にはすいぶん評判がよかつたり、友達づき合いがよかつたり、悪い面は一つも出てこないわけです。

原 斎藤さんは文学の天分をおもちなの、どうして歌を詠まないんですか。

斎藤 これは統計的なナニじゃございませぬし、学問とは離れている、ほんの印象的なものですけど、短歌というのは大体非社交的なものでね。総じて口で十分表現できる人は短歌はうまくならないと思うんですが、それは印象的に、かなりわたしが立场上、歌詠みの方多く接触しての感じですが、いいお歌をお詠みになる方であればあるほど、口からの表現はうまくないですね。それはたしかにいえると思うんです。その表現の代償として歌のほうにくるわけです。いやあちよつとさし

さわりがあるかな。わたしところで、なぜ歌詠みが途絶えてしまったかという、まあ、少なくともあと二代はだめですね。なぜかという、うちの祖父です犯人は。(笑)祖父の性格がおふくろにいきまして、おふくろの性格がこちらに入っているものですから、これ、だめです。歌にはぜんぜん向きません。うちの弟(北柱夫)が文学にいきましたけれどもあれは歌、ぜんぜんいきません。歌を詠んじやいけません。あれは、(笑)

原 詠むまいと、衝動はあつたのを抑えてですか？

斎藤 わたしの場合そういう衝動も知識もない。知識得てから行動というか、人生ををきたらいいけれども、そうじゃないんです。これは感情的なものです。なにかうまく表現できませんけれども……電気のプラス、マイナスの反撥のような感じですね。

原 ちよつとそれがふしぎなうな、もつたいないような気がして、どうしてかと思つてたんです。

斎藤 いまから考えると、意識的な逃避みたいなものであつたかも知れません。

原 それならわかる。要するに利口なんだ。賢明なんだな。あるいはお母さまのほう

に血の濃さがその点だけでしよう。歌をつくらないということだけでは。

斎藤 弟の場合も、もの書いているという事は、さいごにバレルまで秘蔵にしていたよう。

原 ああいう明るい力強いのはお母さんの流れですね。

斎藤 おやじに巧まざるユーモアがあるとおっしゃる方がありますが、おそらくは意識してのユーモアじゃありませんね。ユーモアのように皆さんがお考えになるだけで、ほんとうのユーモアじゃありません。

原 だから、うちでそんなにきびしいなんて、きょう初めて何ったんですが、よそではあまりきびしい人なんて思わないですよ。

斎藤 わたくし、一時駄洒落に振りまわして、一ぱい飲んでではさかんに進発すると、実におこりましてね。これはわたしが医者になつてからの話ですが、「やめろ、やめろッ」ちっともユーモアが通じないんですね。

原 気軽に浅草だとか新宿なんか、ブラブラ散歩されたでしょ、先生。ああいうのは歌とはちよつとつながらないんですけれど。

斎藤 あれは逃避ですね。逃避という言葉やたらにですすけれど、やっぱりおやじの逃

避でしようね。

藤田 茂太先生のご本に、茂吉先生の俳句みたいなものがありましたね。なんていうんだしたか、忘れまして……。

斎藤 あとの本にですか。

藤田 俳句の金にでて、俳句つくれといわれて、なんかありましたね。奥さまとけんかなすつてとか。

斎藤 「夫婦喧嘩で飽くこともなし」ですね。俳句じゃなくて連歌。

藤田 ほくはあれ、あの句好きなんです。でもあれはユーモア以上の何かがあるんじゃないですか。

斎藤 意識してひとさまを笑わしてやろうという意識はないですね。

藤田 同じユーモアにしても、それ以上のものと深いやりきれないニヒリスティックなもの感じますね。

河合 弟さんが秘密にされたというのは、なにか問題があったんですか。

斎藤 それも、断乎として禁止し、拒否し……。

河合 それはどういう意味？

斎藤 さつき申上げた平福百穂先生と父は非常な親友で、そのご命息が病理学の平福

のですけれど、ともかく自分の平生というものを考へての言であつたかとも見えません。

藤田 即自分の文学に対しても非常にきびしかったすからね。ひとに対しても、文学やるということにはきびしかったんでしようね。歌ひとつにしても先生の非常に有名な言葉で、つまりあれはエフトラチオンといつしよだといつていますね。おそらく一句の作例に口の中や頭の中で、何百べん何千べんくりかえした上での作品でしょ。ですからそういうことをやってきて文学とは苦しいものだと思つておいてはしたものでしょう。

斎藤 ずいぶん歌も直していますね。「赤光」の初版からあとになると、ずいぶん直つておりますからね。

原 「赤光」でも、その後でも直してますね。

河合 でもその場合でも医学はすすめられたわけでしょうか。

斎藤 医学はすすめました。むしろ医者になれという強制でございますね。弟の場合も強制です。

河合 はっきりしてたわけでございますか。

藤田 正一さんの場合はどうでした？

河合 わたしの場合、おやじ自身が医者になりたくなかつたわけですから、それは自由だったわけですね。大学を受ける時に、こちらに少し願ひだりました。でも面狭くさいから、おやじのままで絵画やろうかといつたら、「それはやめたほうがいい」(笑)つて、言下にいつたです。

斎藤 さつきの性格の解明でちよつとお伺いしたんですがプロフェッサ、特に臨床のプロフェッサとなりまして、医局員もたくさんいますし、正月なんか、たいがいプロフェッサーのうちへ押しかけますでしよう。そういった場合、どうでございましたか。

河合 父は飲めないものですから、親戚に飲み助がいるもので、それを控えてもっぱら飲ませる、というようなやり方をやっていたようです。

斎藤 そうすると、若い連中押しかけてきても、それを受け入れていらつしやつた？

河合 ええ。それはお正月は必ずやつていたです。ですから医学部に、関連するビジネスもかなりあつたようですね、当時の医局には。そつちにはいや気さしていたんじゃないかと思ひます。やっぱり皮膚科の御大とすればやらなければならぬことも、義務的にあ

一郎先生で、いま、自衛隊の中央病院の副院長なさつていらつしやいます、わたしのおやじを解雇してくだつた方です。

東大の病理にいらして。この先生が、高等学校のころでしよう。わたくしのまだ小さいころで、ごいっしょに食事をしたことがあるんです。その時、一郎先生が、どうして哲学に進みたいといつていらつしやるんですね。おやじがものすごく、断乎としてそれを「いけません。一郎さん、哲学はいけません」なんてやつてるんですよ。ずいぶんよけいな干渉するおやじだと思つたんですけど、とにかく医者になれ。医者になつて、初めてゆつくりと、ある程度生活の基礎を築いてから哲学をやりたいといふようなこと、お父さんを差し置いて、おやじがさかんにお説教しているんです。一郎先生は、とうとう医学部にお進みになつて、やっぱり臨床にはお進みにならないで、一種の哲学ですからね、病理学は。顕微鏡ごらんになるほうにお進みになりましたけれども。ウチの弟の場合がそれとそつくりなんです。彼は最初昆虫やりたくて、動物学に進みたいといふことをいつたんですが、これはおやじが一言のものにはねつけまして、泣く泣く医学にいつたようなも

つたと思ふんです。それは必ずしも、正確いっておもしろいことじゃなかつたんじゃないかと思ふんです。そういふ時間があれば、むしろ文士の方で、時間過したほうがいい。しかしそれは強制させられたといふことがあつたと思ふんです。本人の立場であれば、研究そのものを進めることであれば、もつと興味もつでしようが、いわゆる行事的な政治的な、医学部の政治的なほうは、あまり興味なかつたんじゃないかと思ふんです。

斎藤 父は、うちの病院の職員の人たちの新年会だとか、忘年会だとか、そういつたものには出ましたけれども、そそくさと帰つてしまふ。あと、事務長などに任せまして、それで、自宅でおおせいの方が集まつて、ドンチャカやつたことは、かつてないですね。一番楽しみにしていたのはとろろ会。とろろの好きな人だけを集めて、これもせいぜい四、五人ですね。佐藤佐太郎さんとか、山口茂吉さん、せいぜい四、五人ぐらゐでとろろ食べる。ですからおおせいの方集まつてにぎやかにやるというのには好きでなかつたようですね。もつとも水年つちかかれた実家への遠慮とでもいつたものがあつたのかも知れません。

河合 ですから教授会の時の似顔のメモなんて、よっぽど退屈していたんじゃないかと思ひます。

斎藤 それでまた家庭に戻りますが、書斎なんかも、生活態度、書斎の中の、なにか共通点があるんじゃないかと思うんですけど、たいがいの方は、だれも入れないで、もちろん掃除することも許さないし、ということだと思ひますが、うちの女房がおどろいたといっておりました。疎開のとき、ほとんど荷物動かさなくなつたところで、大部分の本を置いていかざるを得なかつた。ところが疎開先から手紙がきまして、書棚の東側の上から何段目の左から何冊目に「ツアラトウストラ」があるから、それ送れ。女房がいつてみしたら、左から何冊目にもちゃんとあつたと、いまでもいつていますが、頭の中にすっかり書棚が入っているんでございますね。ですから掃除するようなことも、抜いて掃除するようなこと、一切許さなかつたといふこと、よくわかります。

河合 いまの部屋の中の話ですが、とにかく手つけちゃいけないことは、皆さん同じじゃないでしょうか。うちのおやじの場合は、まるで富山の薬売りの引出しみたいのつくり、さいかメラでも、どんどん撮るところでしようが、それをみんなスケッチしております。

森 それは独立した本になつて？

斎藤 全集に……。

森 太田先生のはうは？

河合 最後のほうの、百草譜というのがありまして、野草の写生を毎日克明に絵を、それが同時に日記に描いているんですが、これはどうも出版もできませんけれども、完全に写したという……。

斎藤 うちのおやじは絵描きになりたかつたそうで、子供のころに、ですから、絵が好きだつたと思うのです。それが家庭の事情、社会の事情で、絵を描く雰囲気は全くなかつたんです。それが故郷へ疎開しまして、病院も焼けてしまつたし、いやな医者稼業から離れて、しかも思う存分、遠慮なく、山形弁をしゃべり、周囲の方、ご親切な方たくさんいらして、そういう雰囲気、初めて爆発したような感じがいたしますね。そして約一年半のうちに八十点くらい描いた。いっききに爆発したような感じ、もちろん、しろうとの絵ですから、ナンですけど。しかも、あの当時ですから、絵の具は悪いし、紙は悪いし、非常に条件が悪かつたけれども、なにかよく

まして、いろんな条項分類して入れていたわけですよ。紙も自分が印刷して、メモ的なもの、パツと入るようになって、その中に、晩年に至るまで、ドイツ語の日常構文のイデオムですね、そういうの、たえず書き抜いて、あれが実力養成だつたと思うんですがね。

原 お伺いしますと、建築家で、建築のデザインに関する……そういう仕事はやっぱりお父さんにつながりがありでしょうか。

河合 はい。そういうのではあるつもりですが、わたくしが父とわりとらくに話する機会は絵を描いている、そういう時は、直接表現じゃなくて、こつち向きながら、間接的にいろいろいえるようなチャンスがあつたんです。ほんとうは詩人よりも、むしろ絵描きになりたかつたといふようなことがありますが、むしろそつちのほうで、そういう意味で関連がある仕事じゃないかという気がいたします。

斎藤 うちの父も絵が好きで、この間も興覧会やりましたけれども、言葉より絵のほうが、先に出てしまふといふような手紙残つております。山口茂吉さんの奥さんに、茶碗を買つてほしいという注文の手紙ですが、茶碗という言葉が出なかつたこととみえて、絵を描い

わかりませんが、楽しんで、若々しい絵つていう感じしますね。

森 いま、しろうとつていうお話がでたんですけれど、もちろん荷風先生の日記の中ででてる絵も、いわゆるしろうとのほうに属すると思うし、しろうと、くろうとといふことでなしに、文学のほうでいい仕事をする人の絵つていうのは、いわゆる正式に習つたとかなるとかといふことと別に、特殊な味わいがある場合が、いわゆるくろうとよりも遠つたおもしろ味があるといふんですが、わたくしの父が、子供たちに奈良からよこした手紙の中に、二匹の鹿が立ち上がつてけんかして、その下に四角い箱が描いてある。これは全集にものつていますが、これはひとからまんじゅうをいだけたけれども、一人で奈良の官舎におつて、食べきれないので、官舎の方にわけて、さらに残るのでどうしようもないので兎にやつた。そしたら両方から靴社の鹿がでてきて、けんかしているんだと書いてあるんです。その絵なんでも、もちろん正式に習つたことのない、いわゆるしろうとの絵なんです。やばり非常に側面に描いてありまして、たとえば角だとか、尾だとかいふものの特徴をつかんで、鹿らしく見せている

ちやつて、こういうものを買つてくたさいと書いてあるんです。

原 お三人とも、偉大なお父さんもつて、迷惑は、むろんないでしょうけど、そういう立場に置かれて、どうですか。

森 迷惑はぜんぜん感じておりません。つねに、父があまりに偉過ぎるために、完全すぎるためにもよつと弱るなア、みたいな気持ちをもつことはありますが。——いま、ちょうど絵の話が、本太郎先生と、茂吉先生と、お二方とも絵が非常に好きだつた。それでア、茂吉先生のものも、本太郎先生のものも、すべての著作を拝見しているわけじゃないので、よくわからないんですけど、荷風先生の単行本みますと、日記の場合でも、隨筆の場合でも、時々、挿絵としてお描きになつた絵がのつてる。たいへん文学と絵といふものの関係をおもしろく思うんですけど、いかがでございますでしょうか。斎藤先生や木下先生の小説、あるいは隨筆や日記に、挿絵のような形で絵がのつた場合がございましたでしょうか。

斎藤 手帳というのがたくさん残つておりますけど、手帳はやたらに絵ですね。絵ばかり。スケッチがたくさん。いまですと、小

だけではないで、鹿が立上つてあと足をふんばつていて全体の感じが、無駄のない線で大きくつかんでいるといふような、枝葉にこだわらないところがありまして、たいへんわたくしは興味をもつていましてすけれど……。

藤田 いまお持ちですか。

森 その絵はわたくし持つていふと思ひます。

斎藤 うちのおやじは、マンガを——マンガのつもりでしょうね。これは小学校の三、四年のころの作品だと思ひますが、「馬から落ちた百姓」という題でマンガを描いております。口でよくいえますけれども、雰囲気は岡本一平のマンガつていふような感じが、ちよつとおもしろいです。

原 きょうは、明治の文豪であられる三先生の思い出を血につながるお三方、お忙しい中をお伺いすることができまして、文芸部の特集も非常に充実したと思つております。まことにありがとうございます。